

「信因称報」の否定批判

五十嵐 大策

真宗は、「信心正因称名報恩」（略して「信因称報」）を常教（又は定教）としております。これは、明らかに宗祖親鸞聖人の中に根拠があるところであります。即ち、信心正因の説示は「正定の因はただ信心なり」（正信偈）、「涅槃の真因はただ信心をもつてす」（信巻）等とありますし、称名報恩の説示は「ただ能く常に如来のみなを称して大悲弘誓の恩を報ずべしといえり」（正信偈）、「一生のあひだ申すところの念仏は、みなことごとく如来大悲の恩を報じ徳を謝すとおもふべきなり」（歎異抄第十四章）等とありますことと明確であります。

ことに、称名報恩の有力なる文証となつております「唯能常称如来号、応報大悲弘誓恩」の文が、宗祖以後の本願寺教団の覚如（「口伝鈔」「最要鈔」「本願鈔」）、存覚（「六要鈔」「浄土真要鈔」）、蓮如（「御文章」三の六・八、「正信偈大意」）に継承されているのであります。又、三業惑乱事件の終結後に出生された第二十世広如宗主（一八六七年、学林所化中にあつた消息の中に、正信偈の今の御文を引用して、然るのちに、「信心正因称

名報恩なること顯然たり」と言っている）に継承されており、更にこれが今日の『安心論題綱要』（ことに大江和上の『安心論題講述』は平易な説明がなされている）に、詳細に説明され継承されているのであります。

さて、ところで、近年一部の真宗人によつてこの義が疑問視され懷疑視され否定視されてきました。このことが契機となりまして、論争が起り、特に私達の本願寺教団（ここでは西本願寺系を指している）の真宗信仰に、重大な混乱が生じてきたのであります。

そこで、ここでは、常教否定に対してこれまで批判なされた先輩達の中から、四氏の主張を簡単に紹介しておきたいと思ひます。

（一）大原性実氏『聞法』

「一部には真宗の行は、念仏であるから称名念仏の行を行ふることによつて、信となるというものが、古来よりあり、今の学徒の間にも、行道（念仏）より信道へを論ずるものも

あるが、これは正しい真宗の行観ではない。……近時、信の上の念仏について報謝・報恩なりという常教を否定する学徒のあることである。特に真宗学の講義を大学でなす人びとの中にあることを知るとき、痛歎せずにはおれない。」

この他、大原先生の『真宗教学史研究』（全六巻）の中には、信因称報の主張が二十箇所にわたって論じられていることも、あわせて注意すべきである。

(二) 稻城選恵氏『最近における真宗安心の諸問題』

稻城先生は、著書の中で大きく四項目にわけて、信樂氏の所説に対して詳細に批判されている。謂く、「一、念仏の自力・他力混同の失」「二、信心の自力・他力混同の失」「三、聖道・浄土混同の失」「四、信心正因・称名報恩否定の異義」として論じておられる。信因称報否定を批判して稻城師は言われる。「信心正因と称名報恩を全く別個に考えるから否定するので、信心正因なるが故に称名報恩であり、称名の報恩なることは信心正因なることを明らかにせんがためというべきである。……称名報恩と信心正因を全く別の内容と誤解しているようである。というのは自力の信、要真二門の上では報恩の心はあり得ないからである。云々」

又、更に稻城氏は信樂氏の主張している、いつも緊張しつづけていく罪惡観は、真宗で言う機の深信とは本質的に相違しており、そこに混同が見られることを指摘し注意しておら

れる。即ち、「自らが罪惡深重なることを問題にしている罪惡観と機の深信の罪惡深重の内容とは質的に異なる」と批判している。信樂氏の言う罪惡観は信罪信福の自力心（「信罪」とは自分の罪の重いことを恐れるのくこと。「信福」とは自分の称えた称名の手柄や功德をあてにすること）の自己である。だから、信罪福心の自力心の自己と既に本願の上に問題にされていた機の深信の罪障的存在（「仏かねて知らしめて煩惱具足の凡夫」歎異抄の文）の自己とは、質的に異なるものであると指摘されている。次に、稻城氏は「宗祖の上で信心や念仏に智慧とあるのは、信心や念仏の体である名号の徳の上でいうのである。」と注意されている。信樂氏は、『正像末和讃』の「信心の智慧」を根拠にして「信心の基本的な性格であるところの智慧といわれるものは無分別智であります。」（最近の本では『現代真宗教学』二三五頁、その他）等と主張している。だが、稻城氏はこの様な考え方は信の体と相を混同したものであつて、信心の智慧は信の体としての名号法の上で言えても信の相では言えないものである、それをあたかも聖道門で言う「無分別智」と同じものであるかの様な主張をなしているのは、聖浄二門を混同したものであると批判している。要するに、信心の基本的な性格は、『信巻』の「疑蓋無雜」であると言わなければならないと深く注意されている。

又、稻城氏は、「信樂氏の文章には南無阿弥陀仏とか名号

「信因称報」の否定批判（五十嵐）

という言葉を殆んど目にするのが出来ないのは不可解である」と指摘している。これは岡氏への批判にもあてはまるが、どうも両氏には弥陀の名号を觀念的に解している様な点が強く見受けられると言わなければならないのである。

なお、宗祖の「信心の智慧」については、神子上惠竜氏も香月院深勵師の説を紹介されて、信心の智慧を無分別智の様に解釈することは、滅度密益なるおそれがあることを深く注意している（『歎異抄講義』四六頁以下参照）。

（三）稻垣瑞剣氏「称名報恩論争について」（西本願寺『宗報』昭和五十四—五十五年）

「瑞剣は今年（昭和五十四年）、九十四歳になるが、今日まで、宗制に対して、異議を称える人のあつたことを聞かない。……どうしても動かすことの出来ないのは、正信偈に親鸞聖人が、唯能常称如来号、応報大悲弘誓恩と仰せられた聖句である。この聖句がある以上、称名報恩は、万丈のいわおの上に立つている。……教行信証は尊重するが、御文章は親鸞聖人の思召に反すると言つて、これを輕視し排斥するとは何事かと言いたいのである。……思うに、御文章を捨てよと言うことは、成就文を捨てよと言うことと同様である。」

この他、稻垣師の著書、『安心のかなめ』『死の解決』等には、信因称報義のいわれについて、真宗領解の立場から平易に詳しく述べられている。

四 神子上惠竜氏『歎異抄講義』

「了祥師が歎異抄の研究において、学問的に我々に教えていることは蓮如上人との関係です。……一寸見ますと、蓮如上人は信心を主張し、歎異抄は念仏だから、何か系統が違ふ書物のように思われます。けれども了祥師の研究によりますと、八十通の御文章の本質は歎異抄と同じである。その一つは信心正因称名報恩という八十通の御文章の典拠は、今章（歎異抄第十四章）の「そのゆへは……おもふべきなり」の一段であります。何故かと申しますと、これに「みなことごとく如来大悲の恩を報じ徳を謝すとおもふべきなり」とある「おもふべきなり」という言葉が、我々に向つてお念仏をこう思つて称えよと、称える心構えを教えている訳です。……我々にこの称名はどういう称名かと云うと御恩報謝の称名と思いなさいよ、という。これは行者の用心（うしん）です。称え心を教えているのです。こういう書き方は覚如上人の上にはないのです。蓮如上人の八十通の御文章はどれを見ても、御恩報謝と思えよと、教理的ではなくて称え心を教えているのです。我々の称名はどういう称名かと申しますと、御恩報謝の称名と思つて寝てもさめても称名しなさい、と云うておられるのです。そうするとこの歎異抄第十四章と同じことなのです。了祥師はここをもつて学問的に歎異抄と八十通の御文章とのつながりを初めて明らかにしたのです。」

神子上師は、『歎異抄』研究に大きな業績を示した了祥師の説を紹介しながら、種々有益な意見を述べておられる。中でも、「信因称報」は『歎異抄』第十四章にも説かれているが、その説き方は覚師の説き方とは多少異なり、蓮師の御文章の説き方と同じものであることを詳述されている。

ところで、なお参考までに妙好人浅原才市は、次の様に言っている。

「わしでさえ、親のみにて逢うたわし、なんのあなたが、はからいいらぬ、これから、御恩よろこびましようや」「御恩報謝の念仏は、わが機を知らせ親知らせ下さる慈悲が、報謝念仏」「あさましいのもあなたでわかるあなたなけらにやわかりません。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」「蓮如様となかよくしましう。なかが違えば、わが身の損よ。なかを好うして御縁にあえば、自力他力のさかえが知れる（下略）」「当世はやりの念仏はままおやかかりの念仏で、心に問えば自力念仏、弥陀の一流わからぬからよ。親の念仏得ることは心も晴れて身も晴れて、心も澄んで身も澄んで、水に月日の澄む如く明らかな信の月」

念仏者浅原才市にとつては、特に蓮如上人の御文章の果た役割の絶大なることを深く考えるべきであろう。

最後に、一言しておかなければならない。信楽氏の『現代真宗教学』でしばしば力説されている屈折論（親鸞没後にお

ける真宗理解の屈折」「親鸞没後における信心理解の屈折」等々に賛成しかねる。

まず、信楽氏自身の親鸞教義理解、真宗信心理解が根本的に種々誤っていたのでは、正しい親鸞の世界・真宗の世界は描写出来ない様に思う。次に、覚如存覚蓮如の伝統教義の理解であるが、果して、信楽氏の強調する様な、歴代による屈折論が一方的に言えるものかどうか。むしろ論者の偏執的な見方が強くはたらいっているのではないか、疑義なきを得ない。覚如存覚蓮如の歴代の置かれていた時代状況や時代背景を深く考慮し、歴代の伝道方法や時代表現などをより客観的に研究して、そこに時代を超越してなお一貫して伝えられてきた真宗の本義を究明すべきであつて、軽々しい屈折説の暴論は困る。更には、真宗教学の現代化は、われわれ学する者の誰しもが考えるところであるが、しかしだからと言って、今日まで継承されてきた真宗の根本義を破壊してしまつて良いものかどうか。まことなる現代真宗教学は、なによりも先ずみずからの自己存在人間存在の深い根源的な究明と反省からはじまるように思われる。弥陀によつて、自己の正体をはじめて知らされて、はずかしさとするべきを知る。その様な視点の出来る人にして、はじめて教学の建設的な踏み出しが可能なのではないであらうか。